

特集 **子どもの居場所**

- 2~4面 地域の「よっしゃ」を子どもたちに
寄稿・西川日奈子 (NPO法人西淀川子どもセンター前代表)
- 5面 書評『羽をやすめるとまり木で
「青少年の居場所 Kiitos」から』
- 6~7面 地域YWCAの子どもの居場所事業

The Young Women's
Christian Association

YWCA

〈第33総会期主題聖句〉
平和を実現する人々は幸いである
—マタイによる福音書5章9節—

〈ビジョン〉

女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にす社会

〈ミッション〉

若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉

キリスト教基盤 平和・環境 人権 セーフスペース

4

APRIL
2023

No.773

www.ywca.or.jp

みんな で 子どもを 育もう



(上) 京都YWCA[YここKitchen] (下) 西淀川子どもセンター

小中学校の不登校24万4940人^{※1}、過去最多。
児童虐待の相談対応件数20万7660件^{※2}、過去最多。
こうした統計には表れない「生きづらさ」を抱えている子どもたちは、
どれほどいるだろう。私たちのそばにいる子どもは、どうだろう。
子どもたちが安心して過ごせる居場所づくりの取り組みが少しずつ広がっている。
支援活動に従事している人も、いない人も、子どものいる人も、いない人も、
まずはちよつとした関わりから、みんな子どもを育もう。

※1 「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」 文部科学省 (2021年度)
※2 「児童相談所での児童虐待相談対応件数」 厚生労働省 (2021年)

地域の「よっしゃ」を 子どもたちに

NPO法人西淀川子どもセンター前代表
西川日奈子

大阪の子ども支援のパイオニア。地元では“ひなやん”と親しまれている、西川日奈子さん。生まれ育った西淀川区で保護司になり、さまざまな子どもたちやその家族と出会った経験から、2007年、仲間と共に「西淀川子どもセンター」（以下、子どもセンター）を立ち上げた。まだ「子ども食堂」はおろか、「子ども支援」と「子育て支援」が混同されがちだった頃のことである。それから15年。地域を巻き込んで子どもたちに関わり続けたひなやんが考える居場所のこと、子ども支援のことを語っていただいた。

西淀川
子どもセンターの
ざっくり15年

「毎日開いてると
思ってるだけで安心やねん」

行政などによる「子育て支援」は、まず親（保護者）につなげる必要があると思います。その気になってくれない家庭の子どもは、支援を受けられません。それで、子ども自身が気楽に立ち寄れる場所が地域にあればいいなと思って、この活動を始めました。近所にある「親せぎの家」、「親せぎのおばちゃん」のような活動です。2年目のある平日の午後、高校生の女の子が来所して、私の顔を見るなり「ひどい目にあった」と泣き出しました。コンビニで物色していたら、一方的に万引

見えにくい困難が
子どもを取り巻いている

きを疑われて調べられた、と一気に話して、彼女はこう言いました。「ここ、毎日開いてほしいねん」「えー!? 子どもって、毎日来ないやろ」と戸惑う私に彼女は、「毎日開いてると思ってるだけで、安心やねん」
こんなこと思う子どももいると知って、ボランティアたちと当番を決めて毎日開けるようにしました。
※コロナ禍以降の人手不足で現在は週3日開所。

私たちは子ども時代、どこに居る時にホッとしたでしょう。何にも気にせず、ぼーっとそこに居てもいい場所があったのか、なかったのか。その時の気持ちを思い出せるでしょうか。

同時に、そんな場所がなく、家庭や学校などの事情によって、周囲の様子をいつも気にしながら日々をやり過ごしている子どもがいることも、想像してみてください。

金銭的な貧困も深刻ですが、それだけでなく、いくつもの課題が重なって、子どもたちは元気を奪われています。10年ほど前までは、不登校などで孤立しがちな子どもの多くは「おもろない、ヒマ、



「相談のある人は来て」と掲げて来れるわけがないから、絵本を集めて「文庫」を開く。口コミで来る子どもたちとおしゃべりから多くの「気づき」を得て、新たな取り組みが次々と



最初は公民館の一室を借りていたが「待っても来ない」と、広場にパラソルを立てて下校する子どもたちに声をかけた。翌年NPO化し、市営団地の一室を拠点に本格スタート



退屈、周りがうざい」などと訴えたものです。けれどスマホが普及して、子どもは自分の時間をゲームやSNSなどでバーチャル（仮想現実）で埋められるようになりました。並行して、不登校の子どもも増え、家庭内虐待の対応件数も増え続けて、毎年が「過去最多」となっています。コロナ禍の数年間で、学校がなくても困らないと感じている子どもも少なくありません。

子ども時代はあっという間に過ぎます。この「人生の根っこ」となる時期に、わくわくしたり、ぶつかりあったり、一緒に力をあわせたり、喜びあえる体験や、希望をつなぎあう機会が激減し、経済格差も重なって、他者に見えにくい困難が広がっています。このことを大人の皆さんにぜひ知って、関心を持ってほしいです。

「いっしょに」と 「よっしゃ」でつながる

コミュニケーションのツールが発展し、どれほど便利で効率的になっても、子どもへの願いは「いっしょに幸せになりたい」なんです。身近な人、親や家族、友

達、先生、そんな人たちと「ここに居ていいんだ」と安心したい。それが叶わないことが続くと、深く傷つきます。その反面で「いっしょに」に向かう力があるから、立ち直るのも早い。ちよつと話したり、笑いあったりすることで、元氣になれたりもします。子どもたちの「つながる力」と「回復力」は、大人よりうんと大きいです。私は、それが子ども支援の希望だと実感してきました。

子どもにとって「つながり」のキーパーソンは親です。さまざまな事情からわが子と一緒に生きる気持ちが壊れてしまいそうになると、子どもは灯りや温もりを見失い、不安で心身が冷えてしまう。その理由を十分に理解できず、体ごと受け止めるしかありません。

そんなとき、外部の私たちの「ちよつとした関わり」が、家庭内で起きる煮詰まりや孤立を緩めるきっかけになれば、子どもは回復力を発揮しやすくなります。「よっしゃ、一人ぼっちにさせへん」「よっしゃ、ほつとかへんで」……近くにいる大人たちの「よっしゃ」がきっかけになる。そんな「つもり」でいることが大事だと思います。

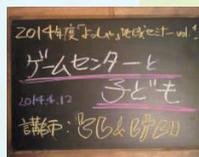
「よっしゃ」とは、了解やエール、歓声や励ましなど前向きな気持ちを表す関西弁です。子どもセンターでは、子ども支援の基盤となる地域の大人に向けた活動を「よっしゃ事業」と名づけています。子どもが願う「いっしょに」と大人たちの「よっしゃ」が出会い、関わりを重ねていく拠点が「居場所」なのだと思えます。子どもを支援するとは、子どもも大人も一緒に喜び、話を聴き、同じ場面や心の景色を共有すること。子どもたちの「パートナーシップ」を築くことも言えます。

若者の存在力と 熟年の底力

仲間と一緒にこの活動を始めてから15年。子どもたちとの年齢差が開くにつれ、若いボランティアたちの「存在力」のありがたさをより実感します。最近のITやゲームなどの話についていけない私のような世代にとって、子どもの話の意味が瞬時に理解できる人は「貴重な仲介者」であり、子どもにとっては「話を通じる大人」となりやすい。「若者」と一括り



子どもたちの「夜の過ごし方」を案じて「いっしょにごはん食べナイト?」を開始。大人と一緒に子どもたちが買い出し、調理し、食べる。1食200円、登録制、家まで送り届ける



大人に向けた「よっしゃ事業」では、地域交流バザーや支援の専門家を招いた講演会など多彩な催しを実施。時に子どもが講師を務め、ゲームセンターの意義を説いたことも

にするのは雑ですが、自分に関わってける年の近いお兄さん・お姉さんに子どもの関心が向くのは事実です。スポーツやファッションなど趣味嗜好から進路の選択まで、子どもたちにとってロールモデルにもなりやすいのです。

若い人にはぜひ、自分の「存在力」に気づいてほしい。その姿が、子どもたちをエンパワーします。一方で、私のような熟年組は、全体を見ながらの底力として、期待の押しつけではない配慮と工夫を心がけたいものです。

子どもセンターの活動拠点には、玄関を入ると広い土間があり、その奥に小上がりの居間があります。子どもたちは若いボランティアと一緒に居間で過ごし、私を含めた熟年組は、土間にある大きなテーブルで過ごすようになりました。通称「土間部」です。夕食の準備にしても、熟年が入るとどうしても仕切ってしまう。しかも一方的によくしゃべる。だから食事も別にして、土間のテーブルにコンロを置いてこっちはこっちで作って食べています。その日の気分一人でなりたい子がこっちで過ごしたり、要請があれば手助けに行ったり、急な来客に対応したり、一段下から力を発揮しています。

「もう3000人は殺したなあ……」

先日、何年も不登校でゲーム三昧の小學生がボソッと「もう3000人は殺したなあ……」とつぶやくのを聞き、胸がざわざわしました。

コロナ禍を境に時代が大きく変わり、戦争が勃発し、社会には不安が広がっています。

少子化や子どもの貧困、不登校が論じられながらも外的な施策・予算で物議を醸す一方で、軍事費だけが大きく計上されています。ゲームの中で3000人を殺して数えている子たちは、この先、大人になってどのような社会を生きるのでしょうか。

私たち大人も日々の生活が大変で、間違えたり理不尽な目にあつたりしながら、いっぱい傷ついています。子どもの保護者たちと話していると、社会との関わりの中で「安心」した経験がなく、自責感、被害者意識、不信任などが根っこに渦巻いているように感じます。また、親自身も子ども時代につらい経験をしていたりもします。

まず大人たちが、出会い・つながり直す

「すべての大人は子どもだった」この当たり前が、私の子ども支援の原点です。子ども時代に心身ともに生き生きと嬉しい時間を少しでも過ごしたら、その根っこが、いつかその子を支え、助けると信じています。でも、子ども時代がつかつた人、思い出せない人もたくさんいると思います。

改めて大人たちが「つながり」を嬉しいものと感じられるようになり、一緒に生きようという気持ちが湧いてくることを願っています。そして、子ども支援をキーワードに、主義主張や立場を超え、納得しながら、出会い直していきたいものです。どうか孤立しないよう大人たちがつながり、この社会を、子どものために一緒に変えていけたらいいなあと思います。

自分が浮き沈みしながらも、真昼の星のような子どもたちのことも、いつも気に掛けられる人、子どもたちの「つながる力」を信頼して見守ることができる人こそ、かっこいい大人ではないかと、私は思います。

profile

西川日奈子 [にしかわ・ひなこ]

1955年、大阪府生まれ。大学卒業後、中学校講師を経てCAPスペシャリスト、保護司として子どもに関わる。2007年、「西淀川子どもセンター」設立、代表に。団体として「子どもと家族・若者応援団表彰」など受賞多数。10周年を機に代表を降り、現在スタッフとして活動。昨年、設立15年のあゆみを記した著書(8面参照)を上梓。



駅に近い元商店(併用住宅)に引っ越し。10周年を機に代表を交替した。子どもたちの成長に伴い、高校生世代を対象にした夜の食堂「ときどき? Our(会わ)ナイト!」も開始

本から学ぶ 「子どもの居場所」



家族のような関わりの中で日常を生きる

東京の調布市にある「青少年の居場所Kiitos（以下キートス）」の主宰者、白旗眞生さんが子どもたちとの深い関わりから感じたことをつづったこの一冊もまた、「子どもの居場所」を考えるうえで参考になるだろう。

なにげない日常生活の
一つひとつを大切に

著者の白旗眞生さんは、ピアノ教師として子どもと関わるうちに、福祉系の大学で心理学を学び、地域や学校、NPOで子どもや保護者の相談活動に従事するようになった。2010年に「青少年の居場所キートス」を開設。それは「行き場がない子どもたちの、家（とまり木）を創りたい」という思いから始



『羽をやすめるとまり木で 「青少年の居場所 Kiitos」から』

著／白旗眞生
発行／日本キリスト教団出版局
1300円＋税

まった。コロナ禍でも休むことなく、訪れる子どもたちに寄り添い続けている。
キートスにやってくる子は、小学生から20代の青年まで年齢もさまざま、自分で探してくる子もいれば、周囲の大人に勧められたり連れられたりして訪れる場合もある。
キートスにルールや規則はない。ただ黙ってその子の話を聴く。大事にしているのは、共に食卓を囲み、手作りの温かい食事をいただくこと。そして、家庭の食卓のように、ごはんは自分でよそう。家庭生活の中で、子どもが大人から自然と学ぶような「気づき」を大切にしているのだ。しかし無理強いせず、それぞれが慣れていくペースに任せている。
子どもたちは、閉室時間が近づくと、後片づけやゴミ出し、戸締りなど、声をかけあ

キリスト教教育の現場のための教案誌に連載された「子どもたちからのメッセージ」を書籍化。巻末には精神科医の石丸昌彦さんとの対談を掲載。「Kiitos」はフィンランド語で「ありがとう」を意味する。
2022年5月刊。

中で、自然と手伝うようになった。温かい「家庭」のような場。それがキートスと言える。

あるがままを受け止め
最善を考えて伴走する

全編を通して伝わってくるのは、白旗さんの子どもたちへの深い思いやりに満ちたあり方である。言葉にならない、子どもたちのあるがままの姿を受けとめ、耳を傾け、最善を考え、伴走する。そのような関係性の中で、子どもたちには時に変化の兆しが訪れる。例えば、感情を表すことさえ許されずきた子にとって、自分の感情に気づいたり、それを人前で表したり、受けとめたりしてもらったことが、自己回復の一步となる。人が生きていくうえで、紛れもない愛情をもって受けとめられる経験が、いかに根本的なことか、改めて気づかされる。人は関わりの中で生きていく。それが十分に経験されることもまた、人にとって不可欠なことなのだ。
困難を抱えた子どもたちに対する時、受けとめる側も時に困難をとまなう。それでも、一人ひとりを丁寧に見守ること、小さな変化に気づくこと、それぞれの状況を思いやりながら信じて待つことの大切さを、この本は教えてくれる。



みんなでカードゲームをしたり、一人でくつろいだり、自由に過ごすことができる。ここでは一人ひとりのペースを尊重している

「家から出て外の空気に触れる」こと、「ごはんを食べる」こと、人と会い「お

日常生活を脅かされ
生きづらさを抱えて

京都 YWCA

[事業名]

Yここ Kitchen

新たなチャレンジに向かう
エネルギーをここで

地域YWCAの 子どもの居場所事業



「家で外に出る」こと、このどれもが叶えることができるのが、「Yここ Kitchen」です。居場所事業として1年前に始まりました。

当時、コロナ禍が2年を超え、若者たちは外に出て、誰かと会って話をして、ご飯を食べるといった日常生活が脅かされていました。「生きづらさ」を抱えた子どもや若者たちが気軽に立ち寄れて、自分の感情や言葉を吐き出す、取り戻す場をつくらう！と話し合い、目指したのが、誰にとっても必要なサードプレイス（居場所）です。居場所に来ることが最終目的ではありません。居場所を通じて一人ひとりが心身の健康を取り戻し、エンパワーされ、仲間を得て、自分の日常生活の中で新たなチャレンジに向かう。そのためエネルギーチャージの場所でありたいと願っています。

食べてつながり 新たな自分に出会う



自発的にウェルカムボードを描いて活動に関わる参加者。一人遊びの「落書きスケッチ」が得意な参加者は多い

「朝からなんも食べてない」「いま、金欠中」「寝られへんねん」「いま、このお菓子はまってるねん、食べてみて！」といろんなことを話しながらやってくる。彼女・彼らとつながる接点がある。【食べること】です。最初は家でも食べるように、とレトルト活用術、とか「手をかけずに食べる方法」を実践する、ということもやっていました。いまは毎回、担当のスタッフが「一人では食べにくいもの」「一緒に作れるもの」など「ここだからできること」を目指してメニューを考え「食でつながる居場所」づくりに取り組んでいます。

他にも、普段あまり動かさない身体部分のほぐし、気持ちを落ちつかせるプログラム、また、自分自身に目を向け他者の思いを聞くプログラムなども行っています。ここでも「自分一人ではできないこと」を誰かと一緒に実



会員特製！シェファーズパイとフレンチパントースト。初めて味わう料理に若者たちは大喜び

践し、新しい自分に出会ってエンパワーされるサーフスペースプログラムを目指しています。

参加者に「YここKitchen」に来る理由をたずねたところ、ダントツ1位は「ごはんが食べれるから！」。さらに「みんながいるから」「のんびりいられるから」「来ていいよって言ってくれるから」「約束しなくても会えるから」……。参加者の多くは、それぞれがさまざまな思いを持っています。その思いには良いものばかりではなく、複雑な感情もあります。その感情が整理できないとき、話を聞いてほしいと思ったときは参加表に○をつけてもらいます。スタッフが時間を取って話を聴きます。その場で解決するものは少なく、思いを整理し、少しでも次へつなげていけるよう支援しています。

誰もが小さなプラスのエネルギーを少しずつ体に貯め、新たなチャレンジができるよう、いつでもこの場所お待ちしています。

京都YWCA YここKitchenスタッフ



夕食はセルフスタイル。家族連れも一人で訪れる高齢者も、いつの間にか話に花が咲く

呉YWCAの「地域・子ども食堂」は、2000年に立ち上げた不登校の子どもたちのための「フリースペース夕食会」から始まりました。それが子どもたちの成長に伴い、いつしかその友だちや地域の人たちも訪れるようになり、地域・子どもたちのための食堂としての活動に変化していきました。そして2021年、新型コロナウイルスの感染拡大で世の中が混んとする中、子ども食堂のあり方を改めて考えました。それは、ただ単にご飯を食べに来るだけの場所ではなく、人と知り合ったり交流したりする場所、ホッとでき

る場所でありたいということでした。こうして、従来の夜の食堂のほかに、昼間の「わいわい食堂」を開設し、新たな展開へと歩みを進めています。実際、いろいろな参加のカタチがあります。お母さんと子どもがご飯を食べ終わった後、カフェスペースで絵本を読んでいたりと、親子で調理ボランティアに参加していた高校生が一人で来るようになったり、また、仕事を終えて食堂に来る道すがらが、子どもとの会話をゆっくり楽しむ時間となっているという母子家庭のお母さんもいます。呉YWCAの「地域・子ども食堂」は「公園」のような場所、子どもから高齢者まで地域の誰にとっても身近な居場所であり、セルフスペースであり続けたいと思います。

呉YWCA 地域・子ども食堂スタッフ



広いキッチンで腕を振るうボランティアの中には地域の男性の姿もみられる

呉
YWCA

[事業名]

地域・
子ども食堂

地域の誰もが集える
「公園」であり続けたい



廃材を利用した木工工作から煮干しの解体実験まで、楽しい学びに子どもたちも夢中

「ワイワイスクール」は、地域の子どもや大人たちが体験型の授業を通して出会い、さまざまな学びでつながる居場所です。2020年、新型コロナウイルス感染症対策のための全国一斉臨時休校のとき、親が安心して子どもを預けられる・子どもが安心して子どもを居場所として開設したのが始まりです。現在は学校の長期休暇に開催していますが、予約受付開始から30分では定員に達するほどです。

講師を務めるのは、現役・退職教員、平塚で活躍している音楽家・大工・茶道家・牧師など、地域の多彩な大人たち

ち。それぞれの知識や経験、専門性を生かした楽しい授業に、子どもたちは目を輝かせて取り組んでいます。そして、なんととっても子どもたちの一番のお楽しみは給食です。ボランティアが愛情いっぱい手間暇をかけて作る給食に毎回ご満悦の様子。特にトウモロコシを茹でてそぎ落として作ったコーンスープは大好評でした。

スクールの最終日、6年生の参加者から「中学生になったらお手伝いに来たい！」と言われたときには、この子の居場所になれたようで、踊りたくなくなるほど嬉しかったです。これからも子どもたちの未来のために、私たちができることを常に考え、アイデアを出し合い、チーム平塚YWCAとして取り組んでいきます。

平塚YWCA会員 佐藤由美子



地域の木工さんが道具や木のことを教えてくれました

平塚
YWCA

[事業名]

ワイワイ
スクール

多彩な「学び」でつながる
地域の大人と子どもたち

エンパワーするNGO



YWCAの本棚

『地域の「よっしや」を子どもにひなやんと西淀川子どもセンターの15年』

著／西川日奈子 発行／藤井事務所 2000円＋税

書評に代えて

ひなやんの「よっしや」を少し

出会って50年近くになる。ひ

なやんこと日奈子さんは当時大

学生で、アサヒキャンプの先輩

ボランティアだった。インクルー

ジョンの考え方が広がる以前に始

まった障がいのある子を含めた小中学生のキャンプで、日奈子さん

は歩けないメンバーをリヤカーに乗せて、グループ全員で無人島を

一周するという快挙（暴挙）をやり遂げた伝説のキャンプカウンセ

ラー。高低差のあるけもの道や険しい崖沿いの道を、場所によって

はリヤカーを担いで移動したそうだ。みんなで力を合わせた達成感

はいかほどだっただろう。日奈子さんは当時から、「発想力」「実行

力」そして人を巻き込む魅力が「ピカイチ」だったのだ。

そんな日奈子さんが立ち上げた「西淀川子どもセンター」が昨年

15周年を迎えた。地域の子どもたちとの出会いから、その時々によ

要な活動「いっしょにごはん！食ベナイト？」（こども食堂）や「て

らこや」（学習支援）を世間に先駆けて行った。大阪YWCAもい

つの間にか巻き込まれ、配食グループのメンバーがボランティア

シエフとして夕食を作りに行ったり、有望なリーダーが同センター

のコーディネーターになってしまったり……。ここ数年、ご本人は

「引退」と叫んでいるけれど、次はどんな活動に巻きこまれるの

か？ ひそかに期待している。

大阪YWCA会員 辻川さとみ

book review

ご協力ありがとうございます

賛助費

- 青木恵子 赤石めぐみ 阿部方子 石川玲子 稲本佑子 江尻美穂子 大野綾子 大野稔 木田みな子 向後理恵 幸田良子 金剛静恵 高橋礼子 武井真美子 竹田とし子 辻井夏子 鶴崎祥子 寺島順子 都木恵子 仁木三智子 笛木直子 藤井初子 牧南 益田明美 山本鉄子 吉田瑠都 由良昌子 日本聖公会京都部三一教会 日本基督教団聖ヶ丘教会 日本基督教団ひばりヶ丘教会 日本基督教団六角橋教会 福岡女学院中学校・高等学校

ピースメーカーズ募金

（平和を創り出す女性のリーダーシップ養成）

- 青木恵子 石川玲子 遠藤真理 太田ゆかり 小宮一子 金剛静恵 篠田茜 柴田幸子 杉山知子 竹田とし子 辻井夏子 鶴崎祥子 都木恵子 仁木三智子 藤井初子 古川道子 若井史子 田中清子 日本基督教団扇町教会 日本基督教団大阪教会 日本バプテスト同盟駒込平和教会 日本バプテスト教団千葉本町教会 日本キリスト教団西千葉教会 日本キリスト教団都島教会 日本キリスト教会横浜海岸教会 尚綱学院高等学校 女子学院高等学校 玉川聖学院 広島女学院中学校・高等学校 フォリス女学院中学校・高等学校 山梨英和中学校・高等学校 横浜共立学園中学校・高等学校 弘前YWCA 福島YWCA 松山YWCA

災害時支援募金

（国内外の災害被災者支援）

- （国内外の災害被災者支援） 嘉屋陽子 鶴崎祥子 牧南 日本バプテスト女性連合 一般財団法人呉YWCA

（オリブの木キャンベーン募金）

- 青木恵子 遠藤真理 木村浩子 栗山義久 小宮一子 坂本純子 杉山知子 高橋千沙子 鶴崎祥子 富岡美知子 仁木三智子 藤井初子 古川道子 日本基督教団扇町教会 日本キリスト教団浪花教会 婦人会 澤山会

弘前YWCA

- 一般財団法人仙台YWCA 湘南YWCA 一般財団法人平塚YWCA 静岡YWCA 公益財団法人京都YWCA ブクラ 大阪YWCA 大宮保育園 松山YWCA

（ウクライナ支援）

- 瀧さをり 鶴崎祥子 富谷千里 日本基督教団扇町教会 日本基督教団北須磨教会 日本基督教団神戸愛生伝道所 日本基督教団静岡一番町教会 子ども教会 大阪女学院高等学校 東洋英和女学院中部高等部 母の会 認定こども園 一元江別わかば幼稚園 横浜共立学園中学校・高等学校 一般財団法人仙台YWCA 福島YWCA

公益財団法人東京YWCA募金箱

- 東京YWCAまきは保育園 一般財団法人平塚YWCA 大阪YWCA大宮保育園 公益財団法人神戸YWCA 一般財団法人呉YWCA 公益財団法人福岡YWCA 長崎YWCA

（パレスチナYWCA支援）

- 大野綾子 大野肇 嘉屋陽子 鶴崎祥子 一般財団法人平塚YWCA 東日本大震災被災者支援募金 青木恵子 遠藤真理 太田ゆかり 嘉屋陽子 木村浩子 具島美佐子 多喜百合子 竹田とし子 鶴崎祥子 都木恵子 仁木三智子 藤井初子 藤原玲子 古川道子 日本聖公会大阪教区石橋聖トマス教会 日本キリスト教団佐世保教会 大森ルーテル幼稚園 園児一同・保護者一同 玉成保育専門学校 恵泉女学園中学・高等学校 宗教部 捜真女学校 同窓会・PTA 横浜共立学園中学校・高等学校 弘前YWCA 一般財団法人平塚YWCA

（カーロスポート募金）

- カーロスポート募金 56件

（2022年12月16日、2023年2月15日敬称略）

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室 Tel.03・3292・6121 Fax.03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

編集発行人 実生律子/偶数月1日発行

旬な情報発信しています | メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp | フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan